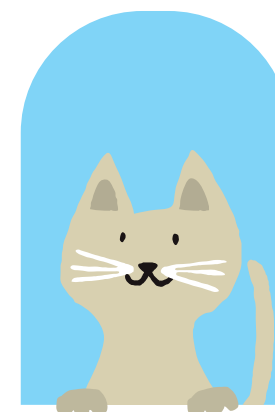
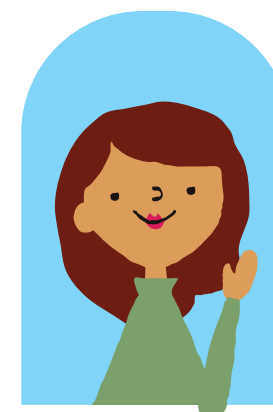
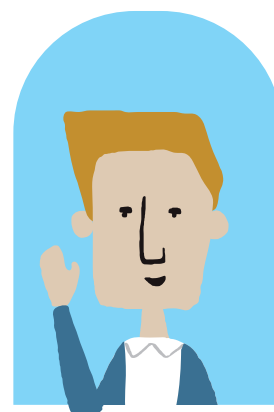
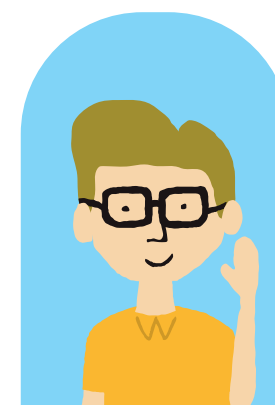
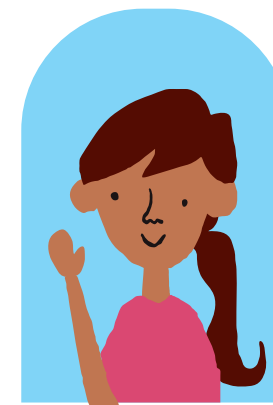




ようこそ JICA!

— 小学校高学年・中学生対象 —



ようこそ JICA!

— 小学校高学年・中学生対象 —



はじめまして JICA!

今、みなさんはこの文章を読んでいますね。

でも、世界には、あなたと同じくらいの歳なのに、文字の読み書きや簡単な計算をすることが難しい子どもたちが、たくさんいます。

そうした子どもたちは家族のために働いたり、何キロも歩いて生活に必要な水を川に汲みに行ったりしているので、

学校に通う時間すらありません。

また、学校に通う時間はあっても学校が近くにはなかったり、学校が近くにあっても教える先生が足りなかったりするため、学びたくても学べないのです。

こうした問題を解決するため、私たちJICA(ジャイカ)は活動をしています。JICAは、そういった国や地域でどのような課題があるかを調べ、現地の人々と一緒に考え、力を合わせ、信頼で世界を繋いでいます。

「将来の夢はお医者さん!」「僕は先生になるんだ!」
こんな声が聞こえてきました。

専門家を派遣して大人たちに教育の重要性を伝えたり
現地の人と一緒に学校を建設したり、
JICAの協力によって、夢を語ることでできる子ども達が
日々増え続けています。

他には、どんな協力があるのでしょうか
さっそく、のぞいてみましょう

将来は
お医者さん!

先生に
なりたい!



開発途上国と呼ばれる国々と日本



世界の中の日本、 日本の中の世界



世界では、人・モノ・お金・情報が国を越えて移動し、助け合っています。たとえば、日本は、生活や仕事に必要なエネルギーの約8～9割、また食べ物の多くを海外から輸入するなど、世界の国々に頼っています。その中には、「開発途上国」と呼ばれる国や地域も含まれています。

開発途上国と 日本人々を結ぶ JICA



JICAは、日本政府の開発途上国支援を実施する機関です。道路や上下水道など現地の人々の生活を支える設備の建設に必要なお金を貸したり、農業などの専門家を派遣したりしています。そして、防災や医療の研修のため、開発途上国から人々を招き防災や医療などの研修も行っています。また、病院や学校などの施設をつくるためのお金の提供もします。実は日本も、戦後の苦しい時に世界の国々に、沢山助けられてきました。東海道新幹線の開通や給食での脱脂粉乳の提供は日本の暮らしを支えてくれるきっかけにもなっていたのです。



開発途上国とよばれる国

開発途上国というのは、経済がまだ成長途中で、自分たちの力だけで生活することが難しい国のことです。こうした国では、「安心して飲める水がない」などの問題がたくさんあります。でも、これらの問題は、日本に住ん



でいる私たちと関係がないわけではありません。たとえば、資源を輸出する国と良い関係を作れていないと、日本も必要な資源を安定して手に入れることができません。開発途上国の問題を一緒に解決し、その国の社会や生活が安定するように助けることは、日本や世界の平和と安定や豊かさにつながるのです。





あなたの興味は？



「人」に直接関わることに興味がありますか？
(例えば、人々の心や体のことなど)

どちらかといえばある

どちらかといえばない

人々をサポートすることに
興味がありますか？
(例えば、心や知識の成長についてなど)

安心安全なまちづくりに
興味がありますか？
(例えば、災害から人々を守る暮らしの土台作りなど)

子供たちの未来をつくる手助けを
することに興味
がありますか？
(例えば、何かを教えたりするなど)

「世界全体の平和」
に興味
がありますか？
(例えば、国と国との間の争いをなくしたり、みんなが仲良く暮らせるようにしたいなど)

災害に備える
技術に興味
がありますか？
(例えば、台風や地震からみんなを守りたいなど)

農業や食に
興味
がありますか？
(例えば、新しい栽培方法などを考えてみたいなど)

教育

平和

保健医療

防災

インフラ

農業

6P

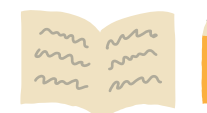
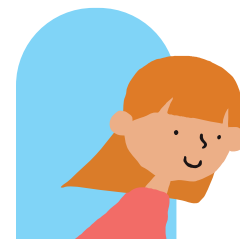
15P-16P

9P-10P

8P

13P-14P

7P



女子教育

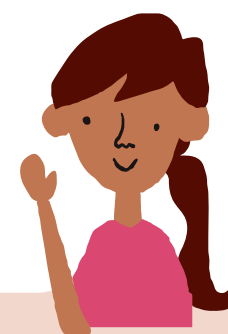
教育

オルタナティブ教育推進プロジェクト

世界には“女の子だから”というだけの理由で勉強することが出来ない子どもたちがいます。例えばパキスタンでは、「10歳を超えた娘を家の外に出したくない」という親の考えや、通える中学校が少ないといった事情があります。そこでJICAは、「コミュニティの中に学びの場を作ろう」と考えました。この場所では、読み書きや計算など、生きる上で必要となるスキルを教えています。こうした取り組みによって女性も仕事に就けるチャンスが増え、人生を自分の意志で切り拓くことができるようになってきています。



世界で働くこんな人



「誰かのために、世界のために役に立つ仕事がしたい」



JICA人間開発部 渡邊 紗良

大学卒業後JICA新卒入構。
評価部やバングラデシュ事務所を
経て、現人間開発部基礎教育グループ
パキスタン担当

中高時代からの熱い志を持ってJICA職員となった渡邊さん。現在は、教育分野を担当し、国の状況に合わせ、どんな協力が良いかを考え、プロジェクトを支える仕事をしています。普段は日本で働いていますが、現地政府やJICAが派遣する専門家などパキスタンで活動している人と密に関わる機会も多いです。プロジェクトが順調か確認するために年に数回現地パキスタンへ。「将来の夢はお医者さん」「学校に通えて楽しいよ」そんな子どもたちからの生の声を聞き、大きなやりがいを感じたそうです。教育は、すぐに効果や成果が見えにくい分野。日々迷うこともあるようですが、それでも将来を担う子どもたちに学びを届けるため今日も「教育」と共に歩み続けています。



アフリカ 稲作

農業

アフリカ稲作振興のための共同体CARD

アフリカでは高まるお米の需要に生産が追いつかず、多くの国が輸入に頼っています。JICAは、アフリカのお米の生産を増やすため、「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)*1」の一員として、政府や研究機関、農家と力を合わせ現地の環境に合った品種の開発やコメ作りなどについて支援をしています。JICA海外協力隊も、村の人々と協力して、コメ作りの普及に努めています。こうした協力もあり、2008年からの約10年間で、なんとアフリカの米の生産量は2倍に増加しました。2030年までに生産量をさらに倍増させるという次なる目標に向け、挑戦は今も続いています。

※1 アフリカの米の生産量を増やすために作られた国際的なグループ



世界で働くこんな人



「国際協力ほどドキドキワクワクさせてくれる仕事はないと思います」



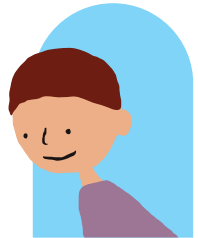
片野 健太郎 専門家

大学院卒業後JICA新卒入構。経済開発部や筑波センター勤務を経て、稲作分野の専門家。

国際協力の世界に最初に足を踏み入れた時から軸としていた「現場主義」。現在、9年勤めたJICAを退職し、農家のために働きたいとカメルーンで専門家になりました。普段はカメルーン米の品質管理と販売促進を行っています。精米からスーパーでの在庫管理や商品の陳列、ポップの作成指導まで地道な作業もこなします。どうしたら地元のコメを手にとってもらえるか、農家の生活を豊かにするために日々奮闘。文化も考え方も違うこの土地で手を取り合って活動することは難しい時もありますが、それでも農家と作った米を買ってもらえる瞬間はやりがいを感じます。常に新しい出会いや困難の連続。エンジョイトラブルの心を持って、いろんなことを面白がりながら活動することが、今日の現地のみんなの笑顔を引き出すことにも繋がっています。

防災

耐震補強



首都圏建物の耐震評価と耐震補強のための能力強化プロジェクト（通称HOKYOプロジェクト）

日本は、東日本大震災など、数多くの地震を経験してきました。エルサルバドルもまた、私たちと同じ地震多発国です。エルサルバドルでは、地震が起きたときに建物を安全で壊れにくくするための工事が、日本ほど進んでいません。そこでJICAは古い建物の耐震化を進めるために、専門家を派遣し、エルサルバドルの技術者たちに、建物の強さを診断し、弱点を見つけて補強する方法を伝えたり、マニュアルを作成したりしました。日本の

経験と技術が、未来の地震から、一人でも多くの命を救うことが期待されています。



世界で働くこんな人



「目標達成のその先まで見据え、彼らの生活を守りたい」



内本 研 企画調査員

エルサルバドルにて大使館の草の根無償資金協力の委嘱員を経験後、JICAエルサルバドル事務所企画調査員として首都圏建物の耐震評価と耐震補強のための能力強化プロジェクト(HOKYOプロジェクト)などに従事。

かつては大使館の職員として学校や上水道の建設に携わってきた内本さん。事業を進める中で、「学校の教育の質をよくするには?」、「建物を長く使うためにはどうしたらいい?」と、建物を建てて終わりではなく「その先」にある課題に目を向けるようになり、JICAの企画調査員になりました。現在担当しているHOKYOプロジェクトでは、技術を教えるだけでなく、建物の耐震化の大切さを現地の人々に伝える広報活動にも力を入れています。当初は「建物の耐震化」について、関係する省庁との話し合いがうまく進まず苦労もあったそう。それでも、粘り強く対話を重ね、「今では政府自ら、地震による被害を減らすための委員会を作り、関係する省庁が協力して取り組めるようになりました。」と笑顔で語ってくれました。「耐震」や「設計」など知識はまだ勉強中という内本さん。「なぜ、どうして?」という好奇心を胸に、現地の人々の命を守るため、今日も学び続けています。



母子手帳

保健医療

地方分権下における母子健康手帳を活用した 母子保健プログラムの質の向上プロジェクト

あなたが生まれた時も、きっと使われていた「母子健康手帳」。予防接種の記録など多くの赤ちゃんとお母さんの命や健康を守っています。かつて多くの国では、赤ちゃんの健康に関する記録がまとまっておらずたくさんの小さな命が失われていました。そこでインドネシアはJICAの支援のもと、母子手帳を導入。日本の手帳を翻訳したのではなく、現地の言葉や文化に合わせ、「断食月（ラマダン）中の妊婦さんへのアドバイス」を加えるなど、内容の改良を重ねました。今ではインドネシアが主体となり、アジアやアフリカの様々な国へ母子手帳を活用することの大切さを広めています。



世界で働くこんな人



「世界中の子どもたちが安心して健康や幸せを手に入れられる社会を作りたい」



八鳥 知子 専門家

日本で看護師として勤務後、JICA海外協力隊でソロモン諸島へ赴任。保健医療分野に従事したあと、専門家を4度に渡り経験。現在地域保健専門家、母子保健専門家。

看護師として医療の最前線で活躍してきた八鳥さん。子どもの命を救うだけでなく、どうすれば病気を予防し、健やかに暮らすことが出来るのか、一歩先へ進もうとJICAの専門家となりました。JICA専門家になったのは今回で4度目、インドネシアで母子保健のサービス向上や乳幼児健康診断のサポートなど幅広く活動しています。現在は、医療現場ではなくそれを管理する保健省と仕事をしており、国レベルで医療問題にどのように取り組んだら良いのか日々奮闘。専門家として政府の意見を聞きつつも、現場で今何が必要とされているのか、過去の経験と照らし合わせ、より良い社会を築くため小さな声も逃しません。世界中の子どもたちが安心して遊び、必要な医療サービスにアクセスできるよう、まずはインドネシアからその一歩を歩み始めます。

保健医療

感染症対策



感染症対策のためのラボサーベイランス強化プロジェクト

ザンビアの首都ルサカの貧困集住地区（スラム）では雨季になると洪水が発生し、トイレの汚物が流れ、水が汚染されることがあります。その結果、水を通じて広がる感染症「コレラ」に罹ることも少なくありません。2023年には、史上最悪ともいえるコレラが大流行。一刻も早い対応が求められる中、JICAは、ザンビア政府を迅速にサポートし、激しい下痢に伴う脱水症状から人々を救うための「経口補水液」を提供する場所を設置したり、「コレラ治療センター」の設置を支援したりしました。日本の専門家と現地の人々がまさに一体となって、治療の最前線を支えたのです。



世界で働くこんな人



「目に見えない病原体の流行状況を分析し、 多くの人々の命を救いたい」



今村 忠嗣 チーフ

大学院時代、フィリピンで行われていたSATREPSの研究活動に参加、その後日本で小児科専攻医として勤務。2023年から技術プロジェクト「感染症対策のためのラボサーベイランス強化プロジェクト」のチーフアドバイザーとして、感染症流行に対するサーベイランス・アウトブレイク対応能力の強化に従事。

より多くの人々を救うため、「感染症の流行がどのように広がっているのか」など、よりマクロな視点で日々戦っています。ザンビアでの活動を始めて3年目、コレラのアウトブレイクに直面しました。日本の医療の常識を考えると、圧倒的に足りない人や物資。医療資源が少ないなかでどう戦うのかなど、ザンビア人職員と協力して活動する中で、日頃のコミュニケーションで築いた信頼関係に助けられたと言えます。普段から医療従事者や疫学技官の方々と共に感染症対策の現場で働き、積極的に対話し、互いに尊重しあうことで、このような非常事態もともに乗り越えられたそう。夢だった海外で感染症対策に取り組む今村専門家。多くの命を守るため、今日もまた、見えない敵と向き合い続けます。

地図で見る 活動場所

15 ページ
.....
平和

ヨルダン

6 ページ
.....
教育

パキスタン

ヨルダン

パキスタン

インド

インドネシア

バヌアツ

エルサルバドル

インドネシア

エルサルバドル

8 ページ
.....
防災

9 ページ
.....
保健医療

14 ページ
.....
インフラ

インド

13 ページ
.....
インフラ

バヌアツ

16 ページ
.....
平和

ウガンダ

7 ページ
.....
農業

カメルーン

カメルーン

ウガンダ

ザンビア

10 ページ
.....
保健医療

ザンビア





災害復興

インフラ



テオウマ橋災害復興計画

南太平洋に浮かぶ、島国エファテ島には、島を囲むように道路が走っています。その道を結ぶ「テオウマ橋」は、日々の買い物や通学はもちろん、病院へ行くためにも必要な、島の「命綱」でした。2015年、巨大なサイクロン・パムによって、そのテオウマ橋が被害を受けてしまいました。そこでJICAは、橋を架け替えるプロジェクトを実施。元の状態に戻すだけでなく、次の災害に備え、強く安全な橋を造ることを目指しました。また、橋の下を流れる川の水があばれないように、水の流れにも気を配って設計されました。こうして、人々が安心して使える、災害に強い橋が完成したのです。

世界で働くこんな人



「アフリカだけが国際協力の中心地じゃないんですよ」



竹上 博子 企画調査員

JICA協力隊ソロモン隊員経験後、大使館の草の根職員としてソロモンやサモアでコミュニティ案件を担当。現在JICAバヌアツ支所企画調査員としてテオウマ橋災害復興計画などに従事。

JICA協力隊としてソロモン諸島に派遣されて以来ずっと島中心に活動していますと笑顔で語る竹上企画調査員。国際協力というとアフリカをイメージする人も多いかもしれませんが、ここバヌアツをはじめとする島国でも国際協力は長く続いています。企画調査員は人と人をつなぐ架け橋の仕事。今はテオウマ橋を作るために現場と政府の間を取り持ち、窓口として日々色々な人と出会い活動しています。そんな中、2024年12月バヌアツで大きな地震がありました。これまで作っていた橋の支柱の位置がずれたり、使うはずだった資材が曲がってしまったりと予想していないトラブルが多発。それでも一緒に働く工事チームが根気強く作業をし「頑張ろうバヌアツ!」と声をあげてくれたことは今でも強く竹上さんの心に残っています。色々な学びや出会いを大切に、「Gudmoning!」と今日もバヌアツのみんなと共に笑顔溢れる1日が始まります。

※Gudmoning: ビスマラ語でおはよう

インフラ

高速輸送システム建設

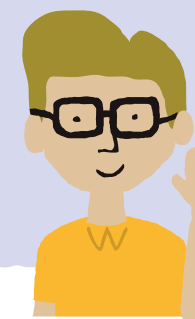


デリー高速輸送システム建設事業

交通渋滞が深刻な首都デリーにはかつて都市鉄道がありませんでした。また鉄道は時間通りに運行しておらず、車内はちらかっていました。そこでインド政府は、安全・正確、清潔で誰もが安心して乗れる都市鉄道を建設することに決めました。ICカードや整列乗車ラインの導入など、日本の経験が活かされ、今では1日に500万人以上がメトロを利用しています。また、女性専用車両の設置で、女性が安心して通勤出来るようになり、社会での活躍機会も増えました。デリーメトロは、インドの人々の暮らしや文化にまで影響を与え、今日も時間通りに走り続けます。



世界で働くこんな人



「自国の発展に貢献できることが私の原動力のひとつです」



Vineet S. Sarin
ナショナルスタッフ

1991年に海外経済協力基金(OECF)に入局。1999年、OECFと日本輸出入銀行の合併に伴い、日本国際協力銀行(JBIC)に移籍。2008年からJICAインド事務所に勤務。

JICAインド事務所でベテランスタッフであるSarinさん。現在は、デリーメトロ事業を担当しています。デリーメトロはインドで最も有名なプロジェクトで、安全・快適・低価格な都市インフラを提供し、道路の混雑緩和や大気汚染対策など社会や国民に大きな影響を与えました。大きなプロジェクトを任されることで、母国インドに貢献できているとやりがいを感じる一方で、インドは州ごとに文化や言語も異なるため、同じ国であっても、信頼を築くのに一筋縄では行かないこともしばしば。それでもインド独特の課題と真剣に向き合いながら1つ1つこなしてきました。日本とインドは今年で67年続く長い友好関係にある国。「ぜひインドを訪れて、多様な文化と日本のODAが果たした役割を見てほしい」と言います。インドと日本がこれからも友好関係を続けられるよう、日々邁進し続けます。

※ODA(Official Development Assistance): 開発途上国の社会・経済の開発を支援するため、政府が開発途上国に行う資金や技術の協力のこと。



水セクター改善計画

平和



シリア難民受け入れコミュニティ水セクター改善計画

ヨルダンには、水がとても貴重な国。そこへ、隣国シリアでの戦争から逃れてきた大勢の人々（難民）が移り住み、水不足が深刻に。もともと住んでいたヨルダンの人々と、新しく来たシリアの人々、両方が水の問題で苦しみ、時にはトラブルになることもありました。

そこでJICAは、古くなって水漏れしていた水道管を新しくしたり、ポンプの修理をしたりして、安定して水が届くように支援しました。料理だけでなく、洗濯やお風呂など私たちの生活に「水」は欠かせません。安全な水を届けることは、暮らしを豊かにするだけでなく地域の平和や安定にも繋がっています。



世界で働くこんな人



「平和や社会の安定、持続可能な未来を目指したい」



SuhaBakir, JD
ナショナルスタッフ

2004年にJICAヨルダン事務所へ入社、その後パレスチナやイラク向けの第三国研修プログラムを担当。その後2017年より、水、環境、エネルギー分野を担当。

JICAの取り組みや目標に共感し、2004年にヨルダン事務所の門を叩いてから今年で21年になりました。研修、環境、エネルギー、水分野など様々な事業を担当しています。この事業はヨルダン人だけでなくシリア難民を含む受け入れ地域の人々に安全な水を届けるプロジェクトで、女性や子どもを含む46,000人以上の人々が恩恵を受けています。今では多くの人々が安全な水を安心して飲める・使えるようになりましたが、それを実現するまでには物流や技術など様々な問題もありました。しかし、Suhaさんをはじめとする事務所員一同と地元のパートナーが協力し、生活に必要な「水」を届けるために尽力しました。「水は命の源」日本からの支援は地域に希望と健康を届けていると熱く語るSuhaさん。今日の私たちの行動が、明日の世界をつくっています。

平和

難民支援



ウガンダにおける難民とホストコミュニティ対象の「難民支援プロジェクト」

もし、あなたの学校の生徒数が、突然2倍になったら？教室が足りなくなるかもしれません。今、ウガンダで、それに近いことが起きています。ウガンダは難民を温かく受け入れていますが、それによって学校や病院などの場所が混雑するようになりました。そこでJICAは、日本のNPOと協力し、栄養バランスの良い食事の普及や、自立のために収入を増やす支援などを開始しました。JICAは、難民を救うことだけではなく、難民を受け入れる人たちにも注目し、誰一人取り残さない平和で安全な社会を目指し続けています。



※NPO: 非営利団体
(利益を目的とせず社会のために活動する団体)

世界で働くこんな人



「互いに手を取り合い、より近くで関わることが1番の魅力です」



渡辺 鋼市郎さん

会社員をご経験後、JICA海外協力隊としてソロモン諸島へ派遣。帰国後に国際NGOやコンサルタント活動を経て、特定非営利活動法人栄養不良対策行動ネットワークを設立、現在同NGO代表。

堀 静香さん

栄養管理士として従事後、JICA海外協力隊としてガーナ保健省にて栄養改善活動を経験。帰国後、同NGOに勤務し、現在ウガンダ駐在員として現地で活躍。

NGOの強みは、行政が踏み込めない領域において、現地の人々と共に暮らし、より近い立場から直接支援を行えることです。渡辺さんはNGO代表としてウガンダと日本を行き来しながら、このプロジェクト全体を見守り、堀さんは実際に現地で暮らし、ウガンダで活動。NGOでの仕事は、プロジェクトの管理から広報までなど多岐に渡ります。現場は首都カンパラから約9時間、でこぼこ道を通って車で進みます。日本とは何もかもが違うこの土地で、事業をうまく進めるにも一筋縄には行きません。彼らが「わかった!」と言っている時でも私たちの思いが100%伝わっていない時があるのです。そんな中でも、必死に語り掛け、共に歩み続けたことで信頼を築きあげてきました。異なるバックグラウンドを持つ仲間と共に、世界を知る機会を頂けていることに感謝しながら、みんなの健康を日々守り続けます。



日本からできる 国際協力



海外で活動するだけが、国際協力ではありません。JICAは日本全国に拠点をもち、学校や会社といった地域の方々と力を合わせ、日本と世界を繋いでいます。皆さんの住む町の近くにも、世界とつながる「扉」があるのかもしれない。では、実際にどんなことをしているのか、少しのぞいてみましょう。

今できること

将来できること

「地球ひろば」で
触れてみよう！

世界の課題を「自分ごと」に！
－ JICA 開発教育支援事業 －

19 ページへ

「世界の課題を知り、自分に何ができるか考える」JICAでは、途上国での国際協力の経験を活かし、日本の小・中学校、高校生や一般の人々のための学びの機会をたくさん提供しています。例えば、JICAの職員やJICA 海外協力隊の経験者が学校へ出向いて授業をしたり、先生方に対して多文化共生社会に向けたワークショップを行ったりしています。また、全国にある「JICA 地球ひろば」では、展示やワークショップを通じて、開発途上国の現状や国際協力について楽しく学べます。



日本の農業技術が世界の役に立っている？

－ 国内センター農業への取り組み －

ここでは、世界中から来た技術者などが、日本の技術を学んでいます。コメの育て方を学んだり、育てた稲の病気を調べたり。日本の学校給食を体験したりして、自国の子どもたちの栄養をよくする方法も学んでいます。ここで学んだことを活かして、自分の国で野菜の直売所を始めた人もいます！日本の農業をはじめとするさまざまな技術が、海を越えてたくさんの人々の未来を支えています。

世界に届け、日本のものづくり － 民間連携事業 －

民間企業も、優れた技術やアイデアで世界の課題解決に取り組んでいます。JICAは現地をよく知る案内役として、日本の企業がその力を発揮するお手伝いしています。たとえば、中央アジアのキルギスにある「白い蜂蜜」という特産品にある日本の企業が注目。その価値を高めるアイデアで商品を開発しました。こうしたビジネスは、現地の雇用を生み出し、技術の向上にもつながり、生産者や現地の人の暮らしを良くします。

国際協力
他にも

JICA 海外協力隊

人生なんて、
きっかけひとつ。

JICA 海外協力隊は、「世界を変えたい」「世界を良くしたい」という志を持つ日本人たちが、教育や環境保護などさまざまな分野の技術や知識を活かして、地域の課題を解決するボランティア活動です。約2年間、発展途上国で生活し、地域の人々と協力しながら、暮らしや社会の発展を支えます。もちろん、言葉や文化の壁に悩むこともありますが「ありがとう」の笑顔で、苦労は大きな達成感に変わります。いつかあなたも、世界を変える一歩を踏み出してみませんか。



JICA 国際緊急援助隊

1つでも多くの命をつなぐために
世界の危機に駆けつける
－ JICA 国際緊急援助隊 －

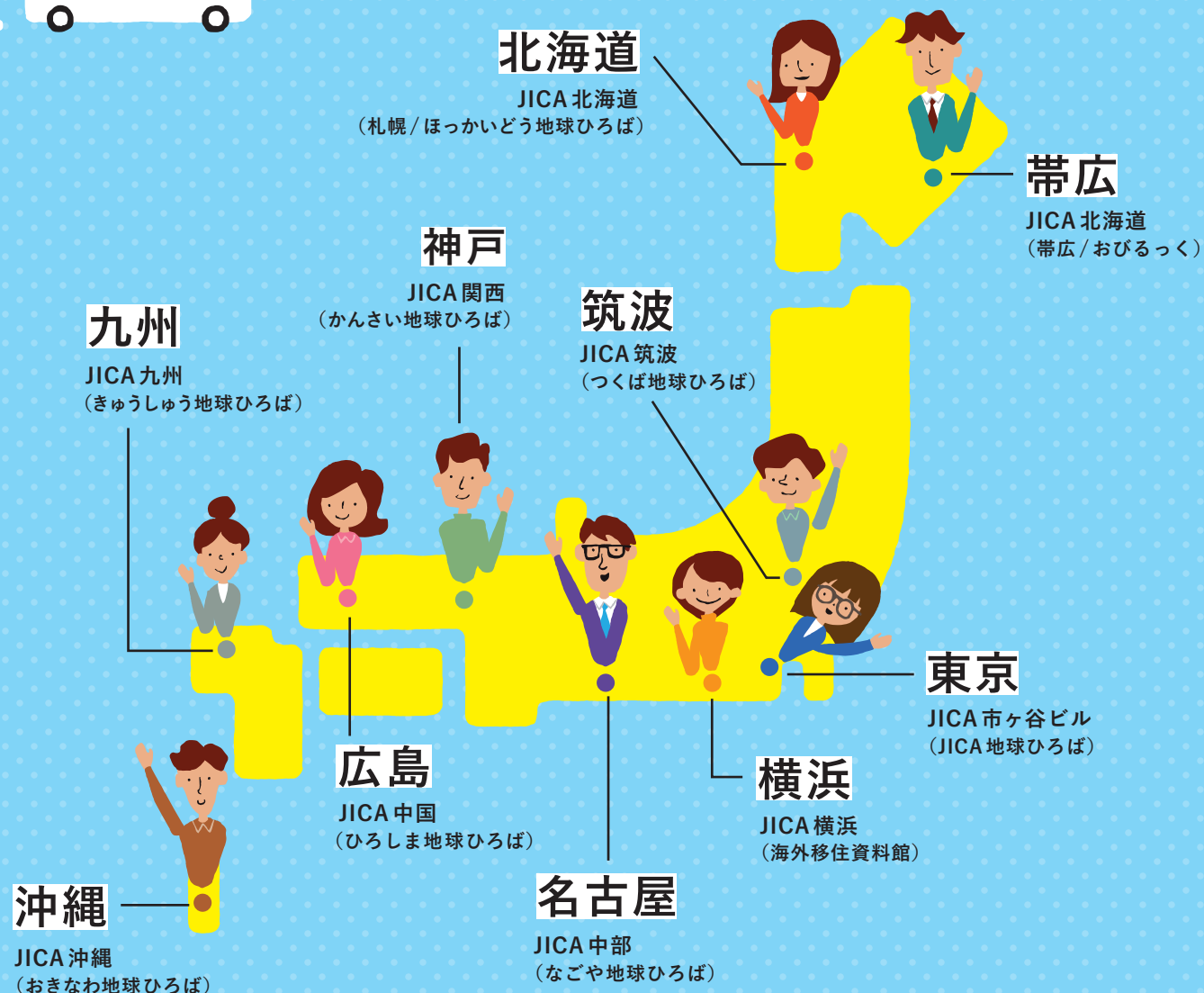
JICA 国際緊急援助隊は、海外で大きな災害が起きたときに、被災地の人々を助けるために日本からいち早く駆け付ける、専門家のチームです。例えば、倒れた建物から人を救出する「救助チーム」、ケガや病気の診療をする「医療チーム」、そして、被害の拡大を防いだり、現地の復興に向けた助言をする「専門家チーム」などです。また、災害が起きたときだけでなく、日ごろから厳しい訓練で技術をみがき、出動に備えています。この活動は、「助けを必要とする人を支え、命を守る」大切な役割を担っています。





あなたの街から、世界とつながろう！

JICA 地球ひろば



「地球ひろば」は世界が抱える課題や、国際協力について学べる体験型施設です。北は北海道から南は沖縄まで、全国で修学旅行等の団体訪問を受け入れています。ぜひお近くのJICA地球ひろばを訪れ、世界とつながってみませんか？

国際
協力

JICAが
協力している国
145カ国

JICA とは

JICAの
海外拠点
97ヶ所

世界で
活動

JICAの
国内拠点
15ヶ所

国内で
世界との
架け橋活動

数字で
見る
実績

JICAから世界へ、世界からJICAへ

● 中東・欧州
協力実施国・地域 **24**カ国・地域
事業規模 **4,866**億円

● アフリカ
協力実施国 **48**カ国
事業規模 **1,089**億円

● 南アジア
協力実施国 **8**カ国
事業規模 **1兆2,002**億円

● 東・中央アジアおよび
コーカサス
協力実施国 **9**カ国
事業規模 **578**億円

● 東南アジア・大洋州
協力実施国 **23**カ国
事業規模 **5,154**億円

● 中南米・カリブ
協力実施国 **31**カ国
事業規模 **748**億円



累計
約**70**
万人

受け入れ
(研修員・留学生)

1万3,083人

派遣
(専門家・JICA 海外協力隊)

8,731人※

累計
約**27**
万人

(注1) 地図中の事業規模金額はすべて2023年度の実績。
ただし地域別に分類できない協力実績は含みません。
長期返済・低金利の有償資金協力額も含みます。
(注2) 2023年度(新規・継続) ※専門家7,702人・協力隊1,029人

名称	独立行政法人 国際協力機構 JICA (Japan International Cooperation Agency)	設立年月日	2003年10月1日
代表者氏名	理事長 田中明彦	所在地(本部)	東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル



JICAとは？
(動画)



JICA
Webサイト



国内拠点
15カ所



海外拠点
97カ所



体験型
施設



SNS公式
アカウント一覧